

令和元年6月18日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02791

研究課題名(和文) 研究室コミュニケーションのための入門期日本語教育用教材の開発

研究課題名(英文) Development of Japanese Language Learning Materials for Beginners to Participate in Activities at Research Laboratories

研究代表者

山路 奈保子 (Yamaji, Naoko)

室蘭工業大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：40588703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：英語による研究活動遂行を前提に来日した留学生・外国人研究員への日本語教育方法の開発を行った。日本語学習のための時間確保が困難な一方で、研究室で日本語の話し言葉に日常的に接しているという彼らの環境を生かし、日本語によるコミュニケーションを観察しようとする意欲を高め、学習への動機づけとすることを基本方針として、教材『Everyday Interactions at/around Laboratory』を開発し、試用した。その結果、研究室における日本語コミュニティに加わりたいという意欲を持つ学習者にはコースの基本方針が強く支持されることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語学習を前提としない留学は今後も増加すると予想されるが、研究の幅や将来の可能性を広げるという点でも日本語によるコミュニケーション力が必要と考え、日本語習得を志す留学生も少なくない。本研究で開発した教材及びそれを用いた教育手法は、日本語コミュニケーションへの観察力を高めることを通じて自律的学習を促進することを目的としており、日本語学習の場は学習者自身の置かれた環境そのもので、教室での学習はその補助するものであると考える。この手法は従来の「文法積み上げ式」の教育はもちろん、いわゆる「サバイバル日本語」教育とも大きく異なるが、学習時間の確保が難しい留学生のニーズに合致したものである。

研究成果の概要(英文)：We developed a teaching method in Japanese including a course book titled "Everyday Interactions at/around Laboratory" to help graduate-level international students and researchers who arrive without previous knowledge of Japanese assuming that English will be the communication medium. As the learners can spare very limited time for attending formal instructions, we focused on promoting their learning skills to make most of their environment, i.e. the laboratory where Japanese is dominantly, if not exclusively, used. Our method encouraged the learners to observe actual communication happening around them to know what they should learn and to actively participate in interactions with others. At the completion of the course, the learners with an enthusiasm to join in the Japanese-dominant community at the laboratory highly appreciated the contents and learning activities offered by our method.

研究分野：日本語教育

キーワード：研究留学生 研究室コミュニティ 日本語会話入門

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、多くの大学で英語使用が推進され、講義やゼミはもとより、学習・研究活動のすべてにわたって英語を使用し、日本語習得を参加要件としないことが海外から優秀な留学生を獲得するための必須条件であるとみなされている。特に、理工系分野では、従来から日本語学習が「不要」とされてきた博士後期課程だけでなく、博士前期課程においても、講義やゼミをすべて英語で行い英語のみで学位が取得できる「英語コース」を開設する大学が増えている。

「英語コース」への留学生をはじめ、日本語は不必要との前提で来日した留学生や研究者は、公式には日本語力を要求されない。しかし、生活のためだけでなく、研究室メンバーとのコミュニケーション、さらには研究の幅や将来の可能性を広げるという点でも日本語によるコミュニケーション力があつたほうが望ましいと認識しており、日本語習得のために何らかの努力を行う学生が多い。一方で、大学で実施されている日本語教育は、必ずしもそうした留学生や研究者のニーズを満たしておらず、「文字習得に時間がかかりすぎ、途中で挫折した」「授業で習う日本語は役に立たないと思い履修をやめた」等の声が聞かれ、「役に立たない」と感じる理由としては「授業で習う日本語は実際には誰も使っていない」「長期間勉強したにもかかわらず周囲で交わされる会話がまったく理解できない」「文法規則は教えられるが、それを生活の中でどう使うかは教えられない。文法は知っているが文を作ることができない」等、理解に関する問題と産出に関する問題の両方がみられる。制度上日本語学習が必須とされず時間的制約も多い彼らが日本語を継続して学習するためには、日本語での成功体験による動機づけが必須であり、従来型の初級文法シラバスに則った教育を行っている限り、日本語を用いて何かができた実感できるまでに時間がかかりすぎる。

「話せるようにならない」日本語教育への批判・反省から、近年、コミュニケーションへの直接的応用を謳う日本語会話教材が数多く出版されており、時間的制約の多い学習者への配慮がみられるものもある。しかし、それらの多くは短期留学生や一般社会人を対象とするか、あるいは地域日本語教室での使用を想定しており、研究活動に携わる留学生や研究員のニーズとは一部重なる部分はあるものの、彼らにとっての日常のコミュニケーション全体を活性化するために十分な内容とはいえず、新たな教材の開発が必要である。

2. 研究の目的

日本語学習経験がまったくなく、かつ日本語クラスに安定的に通うことができる環境にない研究留学生を対象に、総学習時間 15~20 時間程度の短期集中型で、教室での学習が完了した後も研究室環境を生かして自律的な学習を継続する足がかりとなる教育方法の開発を行う。限られた語彙・表現により周囲への働きかけができる可能性を少しずつ増やしつ、周囲で話される日本語への観察力を高めることを目的とした日本語会話入門コースを設定し、その目的に合致した教材を開発する。周囲とのかかわり方に部分的にでも日本語を持ち込むことで、周囲の人々を日本語学習に巻き込むこと、断片的でも「わかった」という体験を意識させることによって周囲で話される日本語への観察力を高めることをめざす。

3. 研究の方法

教材開発のための示唆を得るべく、まず既存の市販教材を用いて、1.5 時間×10 回の日本語入門コースを 2 回にわたり実施した。担当教員による授業中の観察、コース途中の記述式調査、コース終了後の聞き取り調査により効果を検証した。検証結果をもとに、導入する学習項目の取捨選択とモデル会話場面の作成を行い、試作版での試行を経て、全 10 課からなる教材『Everyday Interaction at/around Laboratory』を完成した。教材を用いて 90 分×15 回のコースを 2 度にわたり実施し、授業中の観察結果とコース終了後アンケートの結果に基づき、教材およびこれを用いたコース活動の有用性を検証した。

4. 研究成果

コースでは、授業の冒頭で、日本語を使ってみる機会があつたか、どんな表現を使ったか、周囲の日本人学生などから新しく聞き覚えた表現があるかを尋ねた。また受講者が教室外で抱いた日本語に関する疑問を積極的に提示するよう促した。初期段階での学習者からの質問内容は、日本人の発話に頻出するあいさつ、あいづちやフィラーに関するものが中心で、学習が進むにつれ、提示された表現の異なるコンテキストでの使用可能性や、提示された表現と耳にした表現との違いや関連についての質問が出るようになった。これらの質問から、日本語によるコミュニケーションの観察が積極的に行われていたこと、観察の結果抱いた種々の疑問を解決する場としての役割を授業が果たしていたことがわかった。

コース終了後のアンケート調査からは、教材および授業活動は支持されているものの、授業の目標の達成度に学習者による違いがあることが示された。調査では、「日本語が話せればよかったのに」と思う経験をしたか、具体的にどのような場面でそう思ったかを尋ねたが、そこで研究室や大学内でのコミュニケーション場面を挙げた学習者と、買い物など研究とかかわりの少ない場面を挙げたり「ない」と答えたりする学習者では、その他の質問に対する回答傾向に違いがみられた。前者は、後者と比較して、自由記述で自分が使ってみた表現や周囲から聞こえてきた表現を具体的に多く挙げ、コースの基本方針をより理解し積極的に評価する記述をしていた。このことから、本教材およびコースの運営方針は、研究室における日本語コミュニテ

ィに加わりたいという意欲を持つ学習者には強く支持され、周囲で話される日本語への観察意欲を高めて学習の動機づけとするという目的は達せられたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山路奈保子, 因京子, アブドゥハン恭子, 英語で研究活動を行う留学生・研究者を対象とした日本語教育教材開発への示唆 - 市販教材使用の結果から -, 北海道言語文化研究, 15号, 査読有, pp. 23-37, 2017

〔学会発表〕(計 5 件)

山路奈保子, 日本語によるゼミに参加する日本語学習者の支援方法の探索 - ゼミで聞き取った語句の記録ノートとビデオ録画の照合結果から -, 第20回東アジア日本語・日本文化フォーラム, 上海外国語大学日本文化経済学院, 2019

山路奈保子, 因京子, アブドゥハン恭子, 日本語で行われるゼミにおける外国人研究員と日本人学生による「ひそひそ話」の観察, 第21回専門日本語教育学会研究討論会, 2019

山路奈保子, 因京子, アブドゥハン恭子, 研究室コミュニケーションのための入門期日本語教育 周囲で話される日本語への観察意欲の向上をめざして, 2018年日本語教育学会秋季大会, 2018

山路奈保子, 因京子, 日本語で行われるゼミに参加している入門期学習者は何を聞き取っているか - 日本語教育からの支援のあり方を探るために -, 第19回東アジア日本語・日本文化FORUM, 2018

山路奈保子, 因京子, アブドゥハン恭子, 研究コミュニティを活用した主体的学習を支援する日本語会話入門教材の開発, 専門日本語教育学会第19回研究討論会, 2017

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：アブドゥハン恭子

ローマ字氏名：Apduhan Kyoko

所属研究機関名：九州工業大学

部局名：教養教育院

職名：教授

研究者番号（8桁）：00184630

研究分担者氏名：曲明

ローマ字氏名：Qu Ming

所属研究機関名：室蘭工業大学

部局名：大学院工学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：60727064

(2)研究協力者

研究協力者氏名：因 京子

ローマ字氏名：Chinami Kyoko

研究協力者氏名：須藤 秀紹

ローマ字氏名：Suto Hidetsugu

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。